

多様な生き方を尊重し合える社会の 実現に向けて教師がすべきこと

静岡県立おやま小山高校 **美那川雄一** × 静岡県立静岡東高校 **神谷隼基**

かつて先輩・後輩として同じ学校に勤務したこともある2人の教師が、
3人の若者の言葉を受け止め、これからの学校、そして教師のあり方について語り合った。

3人の若者の言葉を受け止め、考えたこと

一人ひとりの生徒が描いた生き方を、
尊重し合える社会を創りたい

自分が望む社会と生き方を
明確に語らせたい

神谷 美那川先生と私は、前任校で先輩と後輩の間柄でした。今日は、先輩である美那川先生が、3人の若者の言葉をどう受け止めたのか、そして先生が今どんなことを考えているのか、お話を聞くのを楽しみにしてきました。
美那川 3人の若者が創りたい社会を明確に語っていることに感動しました。理想の社会を掲げ、その実現に自分も寄与しようと思うから、3人は高校時代に主体的に学び、そしてこれからも学び続けるのだと思います。
神谷 生徒が夢を語り、創りたい社会を描けるようにすること、そして、その実現のために必要な力をつけること、高校教育の大切な役割なのだと改めて実感しました。ただ現実には、大学入試が近づくと、「この夢をかなえることは自分には無理なんじゃないか」、「夢の実現よりも、まずは大学合格を目指そう」と、創りたい

社会を描く手が止まってしまつ生徒もまだまだ少なくありません。

美那川 自分の生き方を自由に描くことは簡単なことではありません。実際、これまでの社会では、18歳で高校を卒業したら、難関大学に進学し、大企業に入ることなどが、人生における成功とされていきました。しかし今は、私の教え子にも、海外に学びの場を求めたり、自らベンチャー企業を立ち上げたりする者がいます。海外大学への進学を前にギャップイヤーを経験している立崎さんのような生き方を、「その生き方もいいね」と尊重し合える社会になれば、自分の夢の実現に向けて歩き続ける生徒が増えると思うのです。私が創りたい社会は、そんな、自由で寛容な社会です。もちろん、そうした社会は、清水さんが創りたい「失敗を許せる社会」でもあります。
神谷 どんな社会を創りたいかと問われたら、多様な価値観を認め合える社会だと、私も答えます。日頃から生徒に、「大学に進学しさえすれば、人生

学校概要

静岡県立おやま小山高校

設立 1985（昭和60）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約120人

2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北見工業大、岩手大、山梨大、静岡大、釧路公立大、都留文科大、静岡県立大、静岡文化芸術大、北九州市立大などに13人が合格。私立大は、成蹊大、専修大、東洋大、日本大などに延べ108人が合格。短大・専門学校進学53人。就職9人。

静岡県立静岡東高校

設立 1963（昭和38）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約280人

2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、一橋大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、大阪大などに139人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ96人が合格。海外大学進学1人。

の価値が高まるというわけではない」、「自分のやりたいことを見つけ、自信を持ってそのことに挑戦することに価値がある」などと話していますので、3人の若者の生き方に、私は心から共感します。すべての生徒が自分のやりたいことを見つけれらるよう、高校生活の中に様々な出会いや経験の場をつくり、そして、自分の興味・関心や強み、幸せを感じる瞬間などを発見できるように、声をかけ、気づきを促していきたいと、改めて思いました。

高校生に必要な教師の支援とは何か

生徒が描く人生の中で、その「失敗」は どんな意味を持っているのかをともに考える

失敗を避けさせている 教師としての自分がいる

神谷 生徒が、自分の人生を描き、歩んでいくためには、「失敗」との向き合い方を学ぶことが重要になると思います。「失敗」と思った出来事も、本人の向き合い方次第で、その意味が変わってくるからです。「あなたが目指す生き方においては、今回の経験は失敗ではなく、財産なのではないか」などと、教師が出来事の解釈を支援することで、生徒はその後の挑戦を恐れなくなるのではないかと思います。ただ、これまでの私は、生徒が失敗する前に手を差し伸べていました。教科学習でも探究学習でも、よい成績が取れたり、発表までたどり着けたりすることを優先し、十分に試行錯誤する機会を生徒に与えてこなかったように思います。

美那川 生徒本人が「失敗してしまっただ」と思った時こそが、教師の出番なのかもしれません。

以前勤務した学校では、卒業を待た

ずに途中で転学・退学する生徒が例年複数いました。彼らは18歳で高校を卒業するという生き方が成立しなくなっただけですが、私はとことん、そうした生徒と対話をして、転学・退学する理由を明確にするようにしました。実際には、本人にも本当の理由は分からないことが多いのですが、「これが原因だ」といったものを仮でもよいので言葉にすることで、「次はそれを乗り越えていこう」と新しい人生を歩み始めることができるからです。生徒が、「確かにそれが退学する原因かもしれない。それを踏まえて新しい進路を選びます」と語ることで、転学・退学という選択に意味が見いだされ、単なる失敗ではなくなるのだと考えています。

生徒が自分の決断に納得し、その後の人生を描いていくことが何より大切だと思います。ですから、私たち教師には、その助言が正しいかどうかよりも、生徒が前に進んでいけるかどうか重要な時があるのです。

大切なのは、 生徒が歩み続けること

神谷 実は私は、大学院で学んでいる時に、心と体のバランスを崩してしまい、研究を続けられないといけないと分かっていくのに、キャンパスに向けて足が動かなくなつた時期がありました。そこで、心療内科でカウンセリングを受け、なぜ、そういう状態になつてしまったのか、専門家と一緒に丁寧

に自分を見つめ、自分はどんな自分でありたいのか、どんな人生を歩きたいのかを考えました。今回清水さんが、「不登校になったから自己理解が深まった」と話していましたが、私も自分の考え方の癖について、他者の助けを借りて自覚し、霧が晴れたような感覚を味わつたことがあります。つまり、いたからこそ得られるものが確実にあることを伝えることで、思い悩む生徒を支えていきます。



左) 静岡県立小山高校 美那川雄一
みながわ・ゆういち 同校に赴任して3年目。地理歴史・公民科。

右) 静岡県立静岡東高校 神谷隼基
かみや・としき 同校に赴任して4年目。数学科。

生徒にとって、より雑多な学びの空間をつくり、 対話の中で「大切なこと」への気づきを促す

多様性と良質な課題から 学びを得る学校に

神谷 生徒が描く生き方を彩り豊かにするためには、様々な大人との出会いが必要です。対話する相手が自校の生徒や教師だけではなく、多様な年齢、職業の人であるほど、それぞれの生徒が描く生き方を受け止めることができ、寛容度の高い学校になれると思います。

ます。そうした学校の実現のためにも、高校は、もっと地域とのつながりを強めていくべきでしょう。そして伊関さんが語った通り、学校が地域のハブになることを、地域の人たちも期待していますから、例えば、地域の人たちが講師になって、自分が得意なことなどを題材にした学びの場を高校に開き、興味を持った生徒がふらりと参加できるようにすることで、学校はよい意味で雑多な学びの場になれるはずです。

美那川 地域の人を学校に迎え入れればそれで十分だ、というわけではありません。地域には、「開発か、自然保護か」といった、答えがすぐには出せない課題がたくさんあります。そうした、生徒が葛藤するような良質な地域の課題を授業に持ち込めるかどうか、が、私たち教師の腕の見せどころです。生徒が頭を悩ませ、他者と話し合わずにはいられないような題材を、探究学習にも教科学習にも取り入れて、教科横断的な学びを展開しながら、生徒に資質・能力を育んでいきたいですね。

一番大切なことは 教えずに気づかせる

美那川 これからの社会を創る生徒を育てるために、私たち教師の教育観の転換も求められています。かつての学校では、生徒にたくさん知識を与えてきたことで、社会で活躍できる人材を育ててきました。しかし、これからの学校では、学んだことのすべてがこの先も正しいとは限らないこと、そして知識は学んだ時のそのままの形で使えるとは限らず、状況に応じて組み替えて活用すべきことを生徒に伝えることが求められていると思います。そして実際に、授業の中で、自分が持っているものの見方・考え方を疑ってみたり、知識を再構成したりする体験をさせることが、今後ますます重要になってくると思います。そうすることで生徒は、学び続けることの意味と大切さを実感するのではないのでしょうか。

神谷 数学の教師として自戒しているのは、自分が上手に解法を教えさえすれば生徒の学力は向上すると思いがちな点で、自分が教えたから生徒が伸びたのだと喜んだりしないことです。それは、生徒ではなく教師が中心にいる状態ですし、自分が生徒だった時に、そういう先生の指導についていけなかつ

た経験があるからです。

美那川 教師が一方的に教えた知識は、生徒の長い人生の中で考えれば、それほど重要なものにはならないかもしれせん。これからの教師にとってより重要なのは、授業で一番大切なことは教師が説明せずに、生徒自身にかませることです。そのためには、すべてを分かりやすく教えることよりも、生徒がよりよく学ぶためには「何を教えないか」までもを見極めて、授業をデザインする力が教師に求められます。生徒同士、あるいは学校外の人たちと対話する中で一番大切なことに気づく経験が、学び続ける力を生徒に育んでいくはずです。



これからの学校を創る教師として

生徒、そして同僚と対話しながら、
それぞれの人生の創造を支えていきたい

技術の進化など、
社会の変化をキャッチする

神谷 これからの社会の創り手である生徒を支援していくために、私はもつと社会の変化に敏感でありたいと思っています。例えば最近では、ChatGPTなどの生成AIを活用し、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた教材の作成に挑戦しています。AIへの指示内容を改善していくことで、かなりよい教材が作成できるようになりましたが、最大の収穫は、AIを活用するためには、AIに対して適切な課題を設定したり、AIの回答を現実の状況に合わせて精査したりする必要があることなど、人間に求められる力や人間にしかできないことが確認できたことです。今後、AIへの指示内容を練り上げ、校内で共有すれば、教材作成の省力化につながるかもしれません。

美那川 特に若い先生方が業務に追われていて、これまでの仕事で自分が何

を得てきたのか、これからどうありたいのか、未来を描きにくくなっているように感じます。だから私は、若い先生方の話の聞き手になり、未来を描く手伝いをしたいと思っています。ただ、先輩教師から「困り事はない？」と聞かれても、率直に打ち明けることは難しいものです。そのため私は、現場の声を基に作られている『VIEWnext』を若手教師の前に広げて、「こんな学校があるけれど、どう思う?」「本校はどうだろう」などと対話し、若手教師と一緒に新しい学校を創っていくようにしています。

神谷 美那川先生と同じ学校に勤務していた時、私は先生がいる社会科準備室を訪ねて、お茶を飲みながらいろいろな話をさせてもらいました。私たちは、社会科準備室のことを「カフェ」と呼んでいましたね。カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、生徒も教師も互いの人生を多様な視点で認め合い、支え合う学校にしたい。心からそう思いました。

次ページから 対話から見えてきた、これからの学校教育の課題を深めます

学習院大学教授で、中央教育審議会委員も務める秋田喜代美先生も言及されていた「次期教育振興基本計画（P.15）」や、ここまでの若者3人と秋田先生との対話、そして美那川先生と神谷先生の対談を踏まえて、VIEW next 編集部は、これからの学校教育の課題を、次の3つに焦点化しました。

これからの学校教育の実現に向けた課題

- 課題1 **学び続ける人材の育成** ▶ P.20～
- 課題2 **地域・家庭とともに生徒を育てる** ▶ P.24～
- 課題3 **教師が生き生きと働き続けられる環境づくり** ▶ P.28～

課題1のキーワード「学び続ける」は、「次期教育振興基本計画について（答申）【概要】」においても、「人生100年時代に複線化する生涯にわたって学び続ける学習者」という言葉で、「今後の教育政策に関する基本的な方針」の中心に位置づけられています。これからの社会を生きていく上で必要な様々な資質・能力を身につけていくための土台として求められるのが、「学び続ける」という姿勢です。

そうした「学び続ける人材」を育成していくためには、課題2のキーワードである「地域・家庭」との連携が重要になります。地域・家庭と学校が、ともに学び、支え合うことで、社会に開かれた教育課程が実現していくと考えます。

そして、課題1や課題2への取り組みの中心を担うのが教師であり、「教師が生き生きと働き続けられる環境づくり」が、これからの学校教育において最も大切なことの1つであると、私たちは考えました。

次ページからは、この3つの課題について深めていくとともに、8月号から、これらの課題に関する連載をスタートいたします。